武蔵野日曜聖書講筵

歌と人生

――詩篇第148、150章、エレミヤ第31章――

１９９４年4月10日
小池辰雄

『ビルマの立琴』（詩）敵味方相抱く　人生は神讃美の歌　「詩篇」は讃美歌集　永遠の青年
イエス・キリスト自身が詩人　聖霊の無限無量の世界　（詩）米壽を迎えて　（詩）八十路の峠

【詩篇148】

1 エホバをほめたたえよ、
　もろもろの天よりエホバをほめたたえよ、
　もろもろの高所（たかきところ）にてエホバをほめたたえよ。
2 その天使よみなエホバをほめたたえよ、
　その万軍よみなエホバをほめたたえよ。
3 日よ月よエホバをほめたたえよ、
　ひかりの星よみなエホバをほめたたえよ。
4 もろもろの天のてんよ、天のうえなる水よ、
　エホバをほめたたえよ。
5 これらはみなエホバの聖名をほめたたうべし、
　そはエホバ命じたまいたればかれらは造られたり。
6 エホバまた此等をいやとおながに立てたまいたり。
　又すぎうすまじき詔命（みことのり）をくだしたまえり。
7 龍よ、すべての淵よ、地よりエホバをほめたたえよ。
8 火よ、霰（あられ）よ、雪よ、霧よ、みことばにしたがう狂風（あらし）よ。
9 もろもろの山、もろもろの丘、実をむすぶ樹、すべての香柏よ。
10 獣よもろもろの牲畜（けだもの）、はうもの、翼ある鳥よ。
11 地の王たち、もろもろの民、地の諸侯（きみたち）よ、地のもろもろの審士（さばきびと）よ。
12 少（わか）きおのこ、若きおみな、老たる人、おさなきものよ。
13 みなエホバの聖名をほめたたうべし、
　その聖名はたかくして類（たぐい）なく、
　その栄光は地よりも天よりも上にあればなり。
14 エホバはその民のために一つの角（つの）をあげたまえり、

こはそのもろもろの聖徒のほまれ、
エホバに近き民なるイスラエルの子輩のほまれなり、
エホバを讃称えよ。

【詩篇150】

1エホバをほめたたえよ、
その聖所にて神をほめたたえよ、
その能力のあらわるる穹蒼にて神をほめたたえよ。
2その大能のはたらきのゆえをもて神をほめたたえよ、
その秀でおおいなることの故によりてエホバをほめたたえよ。
3ラッパの声をもて神をほめたたえよ、
箏と琴とをもて神をほめたたえよ。
4つづみと蹈舞とをもて神をほめたたえよ、
絃簫をもて神をほめたたえよ。
5音のたかき鐃鈸をもて神をほめたたえよ、
なりひびく鐃鈸をもて神をほめたたえよ。
6気息あるものは皆ヤハをほめたたうべし、
なんじらエホバをほめたたえよ。

【エレミヤ31】

1エホバいいたもう、其時われはイスラエルの諸の族の神となり彼らは我民とならん。2エホバかくいいたもう、剣をのがれて遺りし民は曠野の中に恩を獲たり、われ往きて彼イスラエルに安息日をあたえん。3遠方よりエホバ我に顕れていいたもう。我窮なき愛をもて汝を愛せり。故にわれたえず汝をめぐむなり。……

18われ固にエフライムのみずから歎くをきけり云く汝は我を懲しめたもう。我は軛に馴ざる犢のごとくに懲治を受けたり。エホバよ汝はわが神なれば我を牽転したまえ。然ば我転るべし。19われ転りし後に悔い教えを承しのちに我が脾を撃つ。我れ幼時の羞を身にもてば恥じかつ辱しめらるるなりと。

……

33然どかの日の後に我イスラエルの家に立てんところの契約は此なり。即ちわれ我が律法をかれらの衷におき、その心の上に録さん。我は彼らの神となり彼らは我が民となるべしと、エホバいいたもう。34人おのおのその隣りとその兄弟に教えて汝エホバを識れと復いわじ。そは小より大にいたるまで悉く我をしるべければなりとエホバいいたもう、我彼らの不義を赦しその罪をまた思わざるべし。

●『ビルマの立琴』

「歌と人生」という題でなぜ私は今日は話すかというと、実は竹山道雄という方がある。これはドイツ文学の私の先輩の人です。それが『ビルマの立琴』という本を書いている。第二次戦争の時に日本の軍隊がビルマの方に行って英軍と戦った。日本は敗れて降参するわけですが、竹山さんがそれを材料にして本にした。素晴らしい本です。

水島という上等兵は歌が好きで、立琴をよく弾いた。この立琴は自製です。もともとビルマにそういう楽器があって、自分で工夫して作ってそれを弾いた。自分の好きな「庭の千草」――英語でいうと「ザ　ラスト　ローズ　オブ　サマー」という歌――それから「埴生（はにゅう）の宿」（ホーム　スイート　ホーム）というのをよく弾いた。これは戦争の末期ですけれども、歌が好きなものだから歌う。そうすると、「庭の千草」や「埴生の宿」の曲を聞いて、イギリスの兵隊もこれに和して歌いだした。知らない間にあちらとこちらで合唱することになってしまった。その歌がイギリスと日本の和を結ばせた。戦争を乗り越えて、お互いに好きな歌を歌いだし唱和して、合唱になってしまった。そういう珍しいことが起きた。

旧約聖書で詩篇のところは全部、「何々のうた」と書いてある。あれはみな「ハーラル」（歌）と書いてある。「詩篇」とは「テヒリーム」というヘブライ語で、これは「ハーラル」「讃めたたえる、讃美する」という言葉からきている。「ハレルヤー」は、

「汝ら、ヤーヴェーを讃美せよ」

という、複数の命令形です。「ハーラル」（歌）という名詞の複数形を「テヒリーム」という。「詩篇」と訳してあるのは「讃美歌集」というのが本当の訳なんです。

「庭の千草」は英語では「夏の最後のバラ」というんだけれども、日本の歌では、バラでなくて白菊になってしまった。

『庭の千草』

（アイルランド民謡、訳詞　里見　義）

庭の千草も　虫の音も
枯れてさびしく　なりにけり
ああ　白菊　ああ　白菊
ひとりおくれて　咲きにけり

'TIS THE LAST ROSE OF SUMMER

'Tis the last rose of summer,
Left blooming alone;
All her lovely companions
Are faded and gone;
No flower of her kindred,

No rosebud is nigh,
To reflect back her blushes,
To give sigh for sigh.

（対訳）

夏の名残りのばら
ただひとつ咲き残っている。
優しい仲間たちはみな
色あせて散っていった。
近くには血縁の花も
ばらのつぼみもない、
はじらいを交わし合い
ため息をわかとうにも。

これを日本の兵隊が立琴を弾きながら歌ったら、イギリスの兵隊がこれに和して歌って、歌がお互いの気持をとかして仲良くさせた。歌は、特に神を讃美するような角度の歌は、いかにお互いに心を神に向け、愛の交わりをさせるようにするか、ということです。

●（詩）敵味方相抱く

私はこれに感激して、前にこんな歌を書いた。

召団讃歌A53「敵味方相抱く」
――ビルマの竪琴に因みて――

（１９８８年8月6日作　「埴生の宿」の曲で）

1
人のまこと　神の讃美
戦(いくさ)の場(にわ)の　或る兵士
竪琴(たてごと)弾き　聖名を讃う
名曲　聞き　敵も歌う
噫　敵味方
胸の中(うち)　相抱く
2
戦(いくさ)終り　帰国の路
竪琴の人　影見えず
戦友の叫び　虚空に消ゆ
彼れ断腸の　思念(おもい)なり
噫　戦死者の
慰霊のため　止どまれり
水島上等兵はとうとうビルマの服に替えて、

「僕は日本には帰らない」

と言って、ビルマの僧侶になってしまう。

「戦死した人たちの姿を見ると、とても自分は日本に帰れない。彼らを弔わなければすまない」

と言って、日本兵の戦死者たちの弔いを彼はあちら側でやって、とうとう坊さんになってしまった。

歌が、特に神讃美の歌が、本当の平和をもたらす。そういう意味で、大いに人生は歌っていこうということです。それが、今日の『歌と人生』という題をなぜ言いだしたかということのいわれです。

●人生は神讃美の歌

旧約聖書の詩篇のそれぞれの篇の文頭には――1、2篇の所にはないけれども――3篇からは、「…の歌」と書いてある。この「歌」というヘブライ語は神讃美という内容です。要するに「讃美歌」ということです。詩篇の「歌」という言葉はそれ自身が讃美歌という意味をもっている。「テヒリーム」というのは、「詩篇」ではなくて、「讃美歌集」と言った方がいい。17篇は「ダビデの祈祷（いのり）」と書いてあるが、あとは殆どみな「歌」です。

人生そのものが神讃美である。我々の姿は、人生そのものが歌なんです。悲しい時でも、苦しい時でも、やりそこなった時でも、何でも、我々の心は神讃美でいく。神を讃えている。神讃美と神感謝とは相表裏している。苦難も感謝。苦難においても神讃美。どういう時においても神讃美。神さまに鍛えられていること自体が神讃美に変わっていく。だから、小言がなくなるわけです。愚痴をこぼすことがなくなる。

ブラウニングの詩の中に、

「倒れるは起き上がるためである」

とある。倒れて悲観することはない、それは起き上がるための前段階である。失敗は成功のもとであるという。何かやることに、初めはむしろ失敗してる方がいい。そうすると本当の成功の道がだんだん見えてくる。決してそれでへこたれてはいかん。いかなる状況も全部それは本当のプラスへの段階だと思って進んでいく。そういう心が本当の歌の心です。歌心。歌と人生というのはそういうわけです。

「……そのとき――ふと、隊長はのどまで出かけていた号令の声をとめて、立ちどまりました。ふしぎなことには、森の中から、一つの歌の声があがったのです。あかるい、高い声で、熱烈な思いをこめた調子で、「はにゅうの宿」をうたっているのです。……「まて！」と隊長は大きな声で叫びました。「あの歌をきけ！」森の中の歌声はたちまち二つ三つと数を増し、ついにはあちらからもこちらからもそれに和しました。そしてそれは「はにゅうの宿」の節を英語で「ホーム・ホーム・スイート・ホーム」とうた

っているのです。われわれは顔を見あわせました。これはどうしたということだろう？　森の中にいるのは、われわれの命をねらうおそろしい敵ではなかったのだろうか？　……森の端の方では、別の一団の声が「庭の千草」の節をうたっています。しかし、それも「……ザ・ラスト・ローズ・オヴ・サンマー……」と英語です。森の中は歌の声で一杯になりました。とおくの川の崖の影からも、合唱がおこりました。われわれもそれに合わせてうたいました。……森から広場へ、人影がばらばらと走り出てきました。よく見ると、それはイギリス兵でした。かれらはいくつもの塊になって合唱しています。思いをこめて「スイート・ホーム」や「ザ・ラスト・ローズ」をうたっているのです。……こうなるともう敵も味方もありませんでした。戦闘もはじまりませんでした。イギリス兵とわれわれとは、いつのまにか一しょになって合唱しました。両方から兵隊が出ていって、手を握りました。……」（竹山道雄著『ビルマの竪琴』新潮社版）

だから、戦争なんかどこかへいってしまった。

「庭の千草」というのはいい調子の歌だ。この頃の若い人は知らないかもしれないけれども、私たちには非常になつかしい歌です。日本はそういう宗教的な情緒が非常にうすくなってしまったらダメだ。やはり、聖書が土台になっているヨーロッパは、何といっても、伝統的に違う。日本はそういう宗教的な伝統がないから、若い人は目が醒めてくれなければ困る。テレビやラジオでやるようなあんな歌ばかりうたっているようではしょうがない。魂はひからびてしまう。

●「詩篇」は讃美歌集

詩篇第150篇です。

1 **エホバをほめたたえよ、**
その聖所にて神をほめたたえよ、
その能力（みちから）のあらわるる穹蒼（おおぞら）にて神をほめたたえよ。
2 **その大能のはたらきのゆえをもて神をほめたたえよ、**
その秀（ひいで）ておおいなることの故によりてエホバをほめたたえよ。
3 **ラッパの声をもて神をほめたたえよ、**
箏（そう）と琴とをもて神をほめたたえよ。
4 **つづみと蹈舞（おどり）とをもて神をほめたたえよ、**
絃簫（いとたけ）をもて神をほめたたえよ。
5 **音のたかき鐃鈸（にょうはち）をもて神をほめたたえよ、**
なりひびく鐃鈸（にょうはち）をもて神をほめたたえよ。
6 **気息（いき）あるものは皆ヤハをほめたたうべし、**

なんじらエホバをほめたたえよ。

とにかく、ユダヤ人はこういうものをもって、それがキリスト道において完全に花が咲いて果が実ったわけです。

ヘブライ語の「ハレルヤー」というのは、

「讃美しなさい、あなた方、エホバの神を」

という字です。

「ヤハを讃美しなさい」

ということです。詩篇は全部、讃美歌集ですから、「詩篇」という訳がうまくない。「讃美歌集」です。だから、人生は神讃美の歌。「歌と人生」の歌は神讃美です。

HOME, SWEET HOME

Mid pleasures and palaces
Though we may roam,
Be it ever so humble
There's no place like home!
A charm from the skies seems
To hallow us there,
Which seek through the world,
Is not met with elsewhere,
Home! Home, sweet, sweet home!
There's no place like home!
There's no place like home.

『埴生の宿』（里見　義　作詞）

埴生（はにゅう）の宿も　わが宿
玉のよそおい　うらやまじ
長閑（のどか）なりや　春の空
花はあるじ　鳥は友
おお　わが宿よ
楽しともたのもしや

COMIN' THROUGH THE RYE'

Gin a body meet a body
comin' through the rye;
Gin a body kiss a body,

need a body cry?
Ilka lassie has her laddie,
nane, they say, hae I;
Yet a' the lads, they smile at me when
comin' through the rye.
（対訳）
だれかとだれかが
ライ麦畑で会って
だれかとだれかにキッスをしても、
そっとしといてやりなさい。
どの娘もみんな彼氏がいるのに、
私にゃいないとみんなが言うの。
でも男の子はみんなライ麦畑を通る時、
私ににっこり笑ってくれる。
（訳詞　大和田建樹）

夕空はれて　秋風吹き
月影おちて　鈴虫鳴く
思えば遠し　故郷の空
ああわが父母　いかにおわす

●永遠の青年

「人生は大いに歌っていきなさい」ということです。詩篇も神讃美の讃美歌集です。要するに、讃美の気持がなくなったらお終いだ。ところが、一般の人たちの生活にはこの讃美がない。

「あれはクリスチャンがうたう歌だ」なんて、そうではない。

誰でもが大自然や神の恩寵を讃美していかなければダメです。本当の魂の明るさというのはそこからくる。そうでないと、運命に支配されてしまう。

「ああ、今日は曇ってしまった。明日は雨が降りそうだ」なんて、しょっちゅう天候を心配するようなぐあいに、人生の成り行きを心配する。

「何でもござれ、私は神讃美で行く」と、そういうのとは大いに違うわけです。

我々は魂が老いない。常に前向きで、絶対に魂が老いない。あなた方は永遠の少女で、私

は永遠の青年だ。歳に関係ない。そういう気持を持たないのは、どんなに若くても老人なんだ。そういう気持をもっている人はどんなに歳をとっていても青年なんだ、乙女なんだ。人生はそのような永遠の青年、永遠の乙女というようなことです。それは力が上からくるから。

ロングフェローの詩の中に、

「雲の後ろ側にそれでもなお太陽は照っている。
あなたの運命はすべて人の普通の運命と同じだ。
どの人生の中にも或る日々は暗く陰惨であるに違いない。
だから何も心配するな、くよくよするな」

という句がある。

「雲の彼方に太陽あり。その見えない太陽の光を見ろ。悲嘆の日も悲しい日もあるだろうが、しかし、希望を本当にもて」

と。いや、希望でなくて、

「その現実の奥に太陽があるぞ」

と。アメリカのロングフェローという詩人や、イギリスのブラウニングという詩人は非常に人生のことを歌っています。

私は中学の時から詩が好きだった。アメリカの詩人のホィッチャー、ロングフェロー、ホィットマン。ホィットマンはずいぶん型破りの詩です。韻を踏まないんだ。ミルトン、ブラウニング。

●イエス・キリスト自身が詩人

とにかく、聖書は、特に詩篇は神讃美です。預言書は神さまの方から言っている言葉で、これは恵みの力強い言葉で圧倒される。詩篇はこちらから花が咲いて歌う。預言書というのは上からの力で、上からの光で圧倒される。だから、詩篇と預言書は相呼応するわけです。特に預言書の中ではイザヤ書が素晴らしい。人間性を深く掘り下げているのはエレミヤです。旧約のエレミヤという預言者は非常に人間性の深いひとです。エレミヤに似ているのがホセヤ。イザヤの方に近いのがアモス。明るい恋愛的な愛の歌は雅歌書。人生の深刻なことを語っているのはヨブ記。

とにかく、聖書には親しんでください。それぞれの善さがあるから。いわゆる研究はいらん。身体で読んでいく。日本語の聖書でたくさんです。聖霊の光で、聖霊の智慧で読めば、旧約が生きてくる。

イエス・キリスト自身が詩人です。キリストの言葉は非常に詩的です。説明的でない。断言的な詩的な言葉です。詩は説明しているのではない。歌っている。「聖書解釈」なんて、解釈は要らん。皆さんは、御霊の力と光と生命でその角度から聖書を読めますよ。旧約を本当に生かしているのはイエス・キリストだから。

「我につきて証しするものなり」

というのは旧約聖書のことです。

湖上を歩いてくるのだから、キリストというひとは大変なひとだ。物理的な法則を乗り越えてしまって、霊的な法則で動いている。変化（へんげ）かと思ったら、キリストは、

「私だよ。幽霊ではないぞ」

と、弟子たちはみなびっくりしてしまった。ペテロに「来い」と言ったら、ペテロは始めはちょっと良かったけれども、波を見て沈みかかった。そしたら、キリストにもちあげられた。みなあれは本当のことですからね、大変なことです。これは次元がちがうね、キリストというひとは、大変なひとだ。死人は甦えるし。

「ラザロよ、出できたれ！」

と、言葉に霊的な力があるから。そういうのを、驚嘆驚倒しながら、平伏しながら読まなければダメです。

「参りました！」

と言って降参しながら読むと、力がやってくる。無というのはそういう世界です。そうすると、無量の力がくる。

「ゼロ＝無限大」

に質的になってくる。

「人生は歌なり、どんなことがあっても神讃美なり」

ということ。詩篇150篇でもって、

「そのようにして大いに歌いなさい。ほめたたえよ、ほめたたえよ、讃美せよ」

と。

●聖霊の無限無量の世界

それは詩篇148篇から始まっている。

1 **エホバをほめたたえよ、**
もろもろの天よりエホバをほめたたえよ、
もろもろの高所（たかきところ）にてエホバをほめたたえよ。
2 **その天使よみなエホバをほめたたえよ、**
その万軍よみなエホバをほめたたえよ。
3 **日よ月よエホバをほめたたえよ、**
ひかりの星よみなエホバをほめたたえよ。
4 **もろもろの天のてんよ、天のうえなる水よ、**
エホバをほめたたえよ。
5 **これらはみなエホバの聖名をほめたたうべし、**

そはエホバ命じたまいたればかれらは造られたり。
6 エホバまた此等をいやとおながに立てたまいたり。
又すぎうすまじき詔命をくだしたまえり。
7 龍よ、すべての淵よ、地よりエホバをほめたたえよ。
8 火よ、霰よ、雪よ、霧よ、みことばにしたがう狂風よ。
9 もろもろの山、もろもろの丘、実をむすぶ樹、すべての香柏よ。
10 獣よもろもろの牲畜、はうもの、翼ある鳥よ。
11 地の王たち、もろもろの民、地の諸侯よ、地のもろもろの審士よ。
12 少きおのこ、若きおみな、老たる人、おさなきものよ。
13 みなエホバの聖名をほめたたうべし、
その聖名はたかくして類なく、
その栄光は地よりも天よりも上にあればなり。
14 エホバはその民のために一つの角をあげたまえり、
こはそのもろもろの聖徒のほまれ、
エホバに近き民なるイスラエルの子輩のほまれなり、
エホバを讃称えよ。

全部、「歌え」と。ユダヤ人の優れた人たちが書いて遺してくれた旧約聖書のこういうものを全部とりいれたのがキリストです。キリストは旧約を全部生かしてしまった。

エレミヤ記31章、

「1 エホバいいたもう、其時われはイスラエルの諸の族の神となり彼らは我民とならん。2 エホバかくいいたもう、剣をのがれて遺りし民は曠野の中に恩を獲たり、われ往きて彼イスラエルに安息日をあたえん。3 遠方よりエホバ我に顕れていいたもう。我窮なき愛をもて汝を愛せり。故にわれたえず汝をめぐむなり。……

とある。

「心配いらんぞ」

と。それから凄い言葉がある。

18 われ固にエフライムのみずから歎くをきけり云く汝は我を懲しめたもう。
我は軛に馴ざる犢のごとくに懲治を受けたり。エホバよ汝はわが神なれば我を牽転したまえ。然ば我転るべし。19 われ転りし後に悔い教えを承しのちに我が脾を撃つ。我れ幼時の羞を身にもてば恥じかつ辱しめらるるなりと。……
33 然どかの日の後に我イスラエルの家に立てんところの契約は此なり。
即ちわれ我が律法をかれらの衷におき、その心の上に録さん。我は彼らの神となり彼らは我が民となるべしと、エホバいいたもう。34 人おのおのその隣

とその兄弟に教えて汝エホバを識れと復いわじ。そは小より大にいたるまで悉（ことごと）く我をしるべければなりとエホバいいたもう、我彼らの不義を赦（ゆる）しその罪をまた思わざるべし。」（エレミヤ31・1…34）

「過去のことは全部忘れてしまう、思わない。恵みの中に生きろ」

と。これは新しき契約の有名なところです。エレミヤ記31章31節から34節がエレミヤを通した新しき契約といわれている。だから、

「くよくよするな。躓いたり転んだしたっていいんだ」

と。ところが、人の昔のいろいろな間違いを掘りだして、なんのかんの言うのは、これはサタンなんです、過去の失敗やなんかを取り上げて人を批判するようなやつは。

聖霊の光で読むと、全部それを新しい内容に切り替えていくことができる。本当の自由は、この聖霊をもっているひとが本当の自由をもつ。聖霊の内容は、非常に中身が豊かな内容だから、聖霊という言葉すら躓きになる。聖霊というのは無限無量の霊なんだ。内容は無限無量。人間が限定できるようなものではない。『ファウスト』の中にも、

「本当の真理は限定することはできない。限定したらダメだ」

という言葉がある。限定することは、その人自身が限定されているから。無限定の世界、無限無量の世界です。

それは大自然を見ていれば分かる。大自然は限定しない。雲を見れば雲となり、晴れた空を見れば晴れた空となる。雨を見れば雨となり、雪を見れば雪となる。そういう非常に弾力性のある柔軟な心にならなければダメなんです。嵐を見れば嵐となる。だから、大自然と同じような姿になれば、これが無限無量の世界です。そんな人はほとんどいないね、日本には大人物がいない。というのは、そういう世界を知らないから。政治家に、

「本当に聖書を読め」

と言いたくなる。そうすると、

「註解書を読もうか」

なんて、註解ではない、端的に読みなさい。ゲーテなんていう大詩人は、註解なんか要らない、そのまま読んでいる。身体で読んでいる。

皆さんも、聖書註解書なんか一つもいらん。聖書そのものを読めばいい。そして、ある所でもの凄くうたれる。そうすると、そこから光が出て、また別なところが、今までわからなかったところが読めるようになってくる。そういうものです。

「聖書は聖書をもって読むものなり、註解書で読むものにあらず」

ということ。

あなた方もキリスト直結で行ってくださいよ。そして、すること為すことはみな新しい力と光と智慧が出てくる。

「あれは不思議なやつだな」

と、あなた方は不思議な人間になる。そういう意味で本当に神秘的なひとにならなければダメです。どこを読んでも、そこの中心をパッパッと読めるようになる。とらわれない。聖書にも決してとらわれない。

●（詩）米壽を迎えて

前にこんな詩を書いてあるな。

B24「米壽を迎えて」

（１９９２年2月7日作　一高寮歌「春三月の武香寮」の曲で）

1　千九百の九十二年　我は米壽を迎へたり
　　如月（きさらぎ）の空風寒く　雪臼く天降（あも）り来たれり
　　聖霊の力ぞわが魂は　次元の飛躍与へらる

2　啓示に因れる詩の旅路　み光のもと十余年
　　嶮路なれども跋渉の　わが脚にみ力臨み
　　二十世紀を突破して　無限性なる詩よ成れよ

3　世紀の終末近づけり（おわり）　世界に遍（あまね）き国々が
　　天意の使命自覚せば　必ずや平安臨み
　　かくて愛もて助け合ひ　平和の世界を来たらせん

4　されど庶民も為政者も　サタンの謀略（はかり）に操（あやつ）られ
　　利害でかたみに諍（あらそ）はば　大自然の動植物も
　　そのため遂に滅びゆく　かくて我らも自滅せん

（『エン・クリスト』50号掲載）

本当の神さまとの間の平安がなければ、平和なんか来ないというわけだ。

●（詩）八十路の峠

こんな詩も作ったな。（5～12節を独唱）

召団讃歌B18「八十路の峠」

（１９８４年1月10日作　一高寮歌「暁寄する新潮の」の曲で）

1　明治は三十七の年　日露開戦その前夜
　　如月（きさらぎ）の星閃めけば　弥生（やよい）が岡に産声（うぶごえ）を
　　あげて生（あ）れにし吾（わ）れなるか

2　幼き時に父は去り　母は五人の遺児抱（かか）え
　　お茶の水なる女子校に　教育の道励みつつ
　　われらをよくぞ育てたる

3　我は弱虫泣虫の　寔（まこと）「づくなき」児（こ）なりけり

さはれ真善美に対し　感激性の浅からぬ
夢ゆたかなる少年よ

4

同心町の二階屋に　舎兄政美と暮らしける
附中時代の生きざまが　髣髴として目交に
現前するかな感無量！

5

長兄北京に仆れたり　母は船路に失明す
次兄の忍苦いかばかり　わが青春の暴風雨なり
天地晦冥どん底よ！

6

水戸高校の時にして　大手町なる内村の
聖書の講義胸をうち　光を浴びて信ぜしは
二十歳に満たぬ時なりし

7

病の波に襲われて　惨憺たりし四年間
聖書とルッター、ヒルティーを　灯火として辿りける
独り旅路を忘れめや

8

東大独文学窓は　古典の粋たるゲーテ、シラー、
ダンテとミルトン、欧米の　詩歌の世界に憧憬れて
日に夜を継いで読み耽る

9

藤井の門下五星霜　主の日遵りて貫きぬ
噫、千九百三十年　内村、藤井仆れたり
み空に点る巨星二つ

10

阿蘇の深山の瀧見荘　聖霊降臨、新生よ！
使徒らの次元慕はしや　十字架・聖霊の現実を
生涯を賭けて行き貫かん。

11

大道無門キリストの　無者たる実存賜りて
左顧右眄なくわれは往く　万人を抱くキリストの
無量の愛ぞ力なる。

12

八十路の峠を迎えたり　無尽の涙を霊泉とし
漲る血潮を霊火とし　吹き捲く聖霊を台風とし
一大詩篇は成りゆかん！

（『使徒らの昔を慕ひて』１９９２年刊掲載）

なんて言ってね、自分でやっているんですよ。おもしろいだろ。私はやっぱりこういう歌的人間なんだよね。歌いつつ歩まんというわけです。